

# 文化財学習会

## ふるさと探訪

テーマ 源平屋島の戦いの跡をめぐる

講師 十河 伯行さん

日時 令和7年12月3日(水)

共催

高松市文化財保護協会

高松市教育委員会

げん ぺいたか れき し ねん びょう  
**源平戦いの歴史年表**

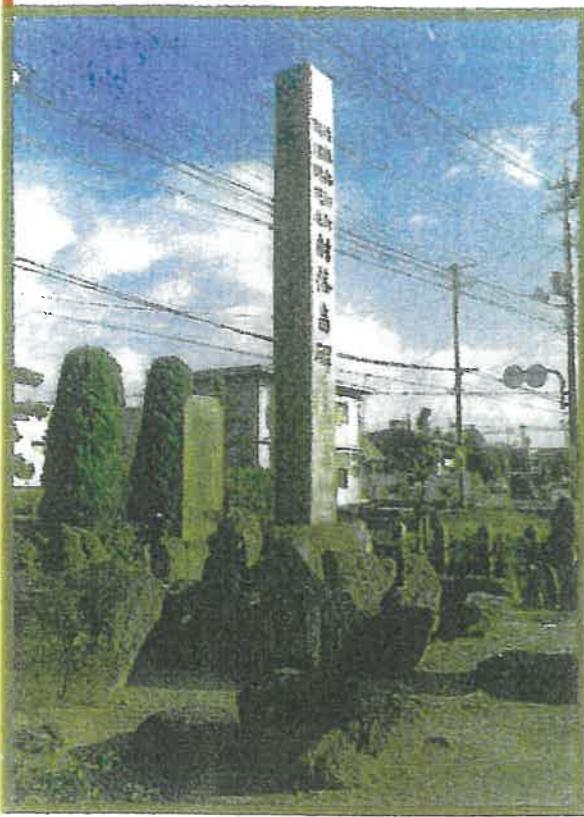
年 月 日	出来事
1159年	平治の乱(天皇による権力争い)が起き、源義朝(源頼朝、義経の父)が戦死。頼朝は伊豆へ流され、義経は京都の鞍馬の寺に預けられる。この平治の乱より平清盛が実権を握る。
1180年8月	頼朝が伊豆で挙兵する。同じ頃、源義仲(頼朝、義経の従兄弟)も信濃(現長野県)より挙兵する。
11月	義経が頼朝と、黄瀬川(現静岡県)の陣で対面する。
1181年	平清盛死去。
1183年8月	源義仲が都を攻め平氏は京都を出て九州に逃げる。
10月	平氏は九州から屋島に移り、六方寺に仮の内裏を作る。
1184年1月	義経が義仲を宇治川(現京都)の戦いで破る。平氏は屋島から一ノ谷(現兵庫県)へ移る。
2月	一ノ谷の戦い。平氏は義経に敗れ再び屋島に戻る。
1185年2月17日	義経は頼朝の命により平氏追討の為に京都を出発。
18日	義経は強風の中を船で阿波(現徳島県)に渡る。
	義経は大坂峠を越え引田～長尾～白山～前田～新田と進軍。
19日	義経は奉札に到着。付近の民家を焼き、内裏にも火を放ち平氏の縁門を占領する。しかし平氏も反撃にて佐藤継信が戦死する、夜、源氏は瓜生ヶ丘に陣を張る。
20日	弁慶の桑切(桑切地蔵)、那須与一の駿の駄、義経の弓流し、鐵引き、長刀舞、などがある。
21日	源氏の軍勢が増えるのを見て、平氏は1年5ヶ月暮らした八栗、屋島を後に縁門(現山口県)に落ちる。
3月24日	平氏は安徳天皇とともに縁門の浦に散る。
1189年	義経が衣川(現岩手県)で自害する。
1192年	鎌倉幕府成立。

# 源平屋島の戦い

## その1. 佐藤継信と菊王丸(平家の強者 能登守義経)

射落畠

いおちばた



平氏の能登守義経は弓の名手、義経を射殺そうと執拗にねらうが、家来たちが義経の前に立ちはだかり、能登守の矢から義経を守ろうとする。そんな家来の一人である佐藤継信が能登守の矢に、左の肩から右の脇へと射ぬかれ、馬からまっさかさまにどっと落ちてしまう。射ぬかれて落ちたので射落畠と呼ばれた。激戦地であったと伝えられる場所に、石碑が立てられている。

義経の身代わりとなり息を引き取った継信は、もとは藤原秀衡の家来で奥州時代からの忠実な従者である。継信の野辺送りをした義経は、菩提を弔い、続けて欲しいと、あの鶴越に自身が騎乗した愛馬「太夫黒」を布施とした。その家来を思う心に源氏軍の一員は感動し、この人のためならと士気が上がったという。

そして、太夫黒は志度寺の住職に贈られたが、ある日、寺からいなくななり、継信の墓の傍らで倒れていたのである。

佐藤継信の墓と、傍らには太夫黒の墓が残る。もとは現在の平田池(王墓池)の地にあったが池の築造により、今の地に移されたと伝えられる。

## その2. 那須与一と扇の的

### 那須与一と扇の的

両軍は戦い疲れ、平氏は沖に源氏は浜へと分かれ、夕暮れ近い波間ににらみ合っている。そこへ、平氏から、女官を乗せた一そうの船が近づいてくる。船の上には手招きする一人の女官と、竿の先に立てた赤字に日の丸を金箔で押した扇。義経は家来に「誰か、あれを射落とせるものはおらぬか」と問う。「それに下野(栃木県)の住人那須与一宗高がよろしくございましょう。空飛ぶ鳥も、三羽ねらえは、二羽は必ず射落とすほどの名人でござります」。こうして呼ばれた与一は、まだ二十になるかならないかの小柄な若武者。「射損じては御大将の名誉を汚すことになります、どうかお許しください」と辞退したが、許してはもらえなかつた。死を覚悟した与一は、馬にまたがり海に乗り入れる。それで、与一の矢は見事に扇を射抜き、両軍からどっと賞賛のどよめきがわき上かつた。

## その3. 景清 しころ引き伝説

### しころ び 鎌引

平氏のさむらい悪七兵景清と源氏の美尾屋十郎とが一騎打ち(一人対一人)のたたかい)の勝負をした時、十郎が太刀(大きな刀)を折られて逃げ出すのを、景清が逃がしてはならないとくま手(長いえの先にクマのつめのような鉄のつめをつけたもの)を十郎の鎌(かぶとの元さやうろう しころ)にひっかけたが、ついに鎌の糸がきり切れて、やっとにげられたとつたえられています。



美尾谷十郎と平景清・鎌引き

## その4. 義経弓流し伝説



義経弓流し

義経が海に入ってたたかっていたとき、わきの下にはさんでいた弓を、海に落してしまいました。まわりの人達の止めるのも聞かず、危険をおかしてその弓を拾いあげた場所です。



# 源平萌えの里

## 屋島合戦の古戦場めぐり

高松市牟礼町一帯はその昔、源平屋島合戦が繰り広げられた古戦場跡。はるか昔、この地で幼い安徳天皇が暮らし、平家一門と義経や弁慶が一戦を交えました。その史跡が町のあちこちに点在しているのです。そんな「源平萌えの里」をそぞろ歩いてみませんか。

歴史物語に心萌えるひとときが待っています。



## 源平時代への旅

まずは今から800年以上も昔の源平時代にまいりましょう。平安後期の11世紀末から12世紀末の約1世紀を源平時代と申します。この時代は、「源氏」と「平氏」という武士団が争った時代。しかし、その始まりは朝廷や貴族間の争いにありました。そして、保元の乱・平治の乱が起こり、その内乱で大きな働きをした平清盛が権力を握るようになります。

そうなると、今度は清盛に反発し、滅ぼそうとする者も出でます。その武士団の戦いが「平氏」と「源氏」が争う源平合戦です。そして、その戦いの一つが、この地で起こった「源平屋島合戦」でした。



苔と石で屋島合戦をジオラマのように表現した庭が美しい「洲崎寺(すさきじ)」。石に彫りだした源平合戦絵巻も圧巻です。



## なぜ屋島?

では、なぜ「源平屋島合戦」がこの地で行われたのか?それは、もともと四国が平氏の支配下にあつたからです。特に讃岐は清盛の祖父宗盛の赴任先でもあり、瀬戸内海の制海権を握って権力を築いてきた平氏一門にとっては、安心できる領地でした。そこで、都を追わされた安徳帝と平氏一門は屋島・牟礼の地に滞在し、再び権力の座に就く日を待っていたのです。

ちなみに、当時は島であった「屋島」は、屋根の形をしているのでその名が付きました。

## 牟礼は幻の都

寿永2年(1183年)、源氏軍(源義仲)が都に攻め入り、平氏は安徳帝と三種の神器と共に西へと逃げ延びます。一時は九州まで行きますが、讃岐の地まで返り、ここに滞在することとなります。

そこで、仮の住まい「行在所」としたのが、当時大寺院であった牟礼の「六萬寺」でした。ここに、天皇の乗り物である御鳳輦と三種の神器を置かれたのです。三種の神器とは、八咫鏡、天叢雲剣、八尺瓊勾玉。これを持つことが天皇の印とされてきました。この地に、三種の神器と共に天皇がおられたということは、この地がつかの間の都であったとも申せましょう。

しかし、このとき、都ではすでに後鳥羽天皇が即位し、源氏軍に何が何でも三種の神器を取り戻すよう命令がくだるのです。その後、再び都を目指した平氏

ですが一の谷の戦い(1184年)で敗れ、再びこの地に返り、屋島の麓に建てた行在所で安徳帝は過ごされておりました。



安徳天皇の御尊像



### 義経の讃岐路ルート

- 18日深夜 大坂峠
- 19日夜明け 馬宿
- 19日午前8時 古高松
- 20日 屋島合戦
- 21日 志度合戦



総門



源義経 八幡大合戦/部分  
(高松市歴史資料館蔵)

平教経 八幡大合戦/部分  
(高松市歴史資料館蔵)

激戦地の死闘

牟礼町の「射落島」は源平合戦の激戦地。ここで、弓の名人、平教経は、敵方のリーダー源義経を狙います。側近たちは義経を守ろうと必死。忠臣の佐藤継信は、教経の矢に射抜かれて落馬。その継信の首を取ろうと、教経の家来、18歳になる菊王丸が走り寄ってきました。兄の首を取られてはと、今度は継信の弟、忠信が弓を放ちます。その弓は菊王丸を射抜きました。菊王丸の亡がらとともに自陣に戻

## 義経のこだわり

ライバルの教経が弓の名人だったからでしょうか、海中に馬を進めた義経は思わず落としまっ

た自分の弓が貧弱であったことを気に掛け、矢が飛び交う戦場で弓を拾おうとしました。



弓流しの跡

## 力持ちはどっち

上陸して来た平氏軍に真っ先に戦いを挑んだ源氏軍の美尾屋十郎。その馬が射抜かれ、十郎は馬を下りることに。そこへ大長刀をふるって平氏の武者が切りかかってきます。やりあっているうちに十郎の太刀が折れたので逃げ出すると、兜の鎧をむんざり掴まれました。十郎も敵も力が強いので、しばらくは引き合ったまま。やがて十郎の鎧が引きちぎれます。平氏の武者は、ちぎれた鎧を高々と掲げて、

我こそは京で童が尊する  
の悪七兵衛景清と名乗  
ったのでした。十郎が景  
清の腕の強さを讃めると、  
景清は十郎の首の強さ  
を讃めたということです。  
鎧引きの旧跡  
鎧(しき)：かぶとの鉢の左右から  
後ろにたれて、首をおおむの

## 那須与一と扇の的

源平屋島合戦の一番の見どころは、那須与一が扇の的を射落とした場面。そのとき、命中を射った場所が「折り岩」、矢を射るため馬を停めた岩が「駒立岩」として残されています。



折り岩

駒立岩



源平合戦屏風図 左隻 (高松市歴史資料館蔵)



射落島

佐藤継信の墓



菊王丸の墓(屋島東町)

安徳天皇社(屋島東町)

った教経は、その日は戦いもせず菊王丸の死を嘆き悲しんだということです。

一方、継信も義経に見とられて絶命。その墓は王墓地区に建てられています。その傍らには、義経が後白河法皇から賜った名馬・太夫黒の墓もあります。どちらも江戸時代に、庵治石で造られたものです。

## さとうしきのぶ ちゅうし ◎佐藤継信の忠死

能登守教経は唯一矢で判官（義経）を射とめようとしたが、源氏方は馬の首を判官の前に立ち並べて防ごうとした。能登守はやくも鎧武者十騎ばかり射落した。

佐藤継信は陸奥の出、弟忠信等と共に義経の四天王とよばれて、奥州より従って来た剛力者だが、能登守の矢に首の骨を射貫かれ真逆様に落ちた。能登守童の菊王丸が太刀で継信の首を取ろうとしたので、忠信の矢が菊王丸の腹巻を射貫いた。

義経は痛手の継信を洲崎寺の本堂の扉に乗せて宇龍が岡の陣に入れ、馬より下りて熱い涙を流した。やがて義経は「此の辺の尊き僧を召出して弔え」と言って、義経寵愛の名馬「太夫黒」を僧に与えて、弔わせたと伝えられている。

その後継信の墓の前で太夫黒が死んでいたので一諸に埋めているのがこの墓地である。継信が射落された場所は「射落畠」として、北へ300mの処に、昭和6年に子孫の佐藤信古氏により共に整備されている。

（招いたのは志度寺の覚阿上人ではなく、六萬寺の僧だという説が正しいのではないか？）



瓜生が丘

## なまなたいづら ◎長刀裏と弁慶の投げ石

源平合戦の時の事、源氏の軍勢は寺・堀の間（源生ヶ庄）に陣を張りましたが、寺事頭の水がなかったので、弁慶が大長刀で井戸を開けました。

その時、地下約1メートルの所から大石が出てきた。これを機で見ていた義経四天王の一人住職信が「この石をお前の力でどこまで飛ばせるか飛ばせてみよ」と云うと、弁慶は「心得た」と力いっぱい高く持ち上げて「しゃー」という声と共に東へ向いて投げ捨てた。石はものすごい音と共に大町村と覚泉山を越えて、約4キロ飛び原村の田んぼの中に飛んでいった。これを見た信が笑顔で、「源氏に勝算あり」と大声で源氏の白旗を力いっぱいに振ったという。翌日の朝、弁慶は戦死したが、平東方は歌覚して船で西へとのがれていった。

弁慶の投げた石は、今でも原の田んぼの中にぽつんと立っていて、800年前の物語を今に語りかけている。又誰一人として動かす音もない不思議な石です。

場所は（株）鶴商の西150メートルの田の中にある。



## なまなじぞう ◎葉切地蔵

源氏の本陣があつた瓜生ヶ丘での事、食料調達と御膳が大変だった。炊事用具も不足して困っていた尼へ弁慶が何處からか人の背丈ほどの大石を握いで来て、その石をひっくり返してその上で葉巻を握き長刀で切った。なしとてかく代わりにしたのは石の地蔵だったと言われます。以来この地蔵を土を「葉切地蔵」と呼ぶようになりました。

今、地蔵堂は建て直しているが、地蔵そのものは阿波の人にはしたままになつていて、周りに五輪塔があります。



## かんぐしおうはか ◎神櫛王墓

神櫛王は、第十二代景行天皇の皇子で、讃岐の国造の始祖である（日本書紀卷7）。王が亡くなられて後、この地に葬られ、昔はこの墓を大墓又青墓といつており、この辺りの地名も王墓と呼んでいる。

讃岐に初めて国造が設置されたのは、応神天皇の御代で、景行天皇の皇子神櫛王三世の孫一須売保礼命（スメホレノミコト）が任せられたのが最初である。故に神櫛王は讃岐の国造の始祖といわれる。

明治2年、雑草に埋もれていたのを高松藩知事

松平頼聰が神祇官の許可を受けて現在の陵墓に改築した。宮内庁の管轄の中で、陵墓守部を置いて毎年10月20日に正辰祭（命日）と称する祭礼をおこなっているのは、ここだけ。

神櫛王（かみくしのみこ）は、「古事記」、「日本書記」に記される王族で、景行天皇の17番目の皇子で、兄に日本武尊（ヤマトタケル）がいる。神櫛王は宮処（政庁）を前田八幡社（前田西町）あたりに置いていたようだ。

又、星島を望む海岸に別荘を建て（古高松村の大姓揚氏の居宅—木村内科の南方）政務の疲れを癒された故、薨去された後その東の丘（現在地）に葬られたといわれている。



神櫛王は、人気のある王で、広く讃岐の神社に祀られており、牟礼町のほか、坂出市と琴平町で、それぞれに墓もある。

**城山神社**（坂出市府中町）→社伝によれば、「景行天皇の命を受けて悪魚を退治した神櫛王が120歳で薨去された後、里人により城山の頂上に祀る」と。

**櫛梨神社**（琴平町）→社伝によれば、「神櫛王は、悪魚を討つために土佐からこの地に立ち寄り櫛船大明神を祀り祈願した。其後無事に悪魚を討ち取って当地に城山を築き、国造となった。仲哀天皇8年（199）125歳で亡くなった皇子を櫛梨山に葬り廟を建てて祀ったのが起源」

なお、香川に伝わる讃留靈王（サルレイオウ）伝説によれば、景行天皇23年（98）に讃留靈王が勅命を受け、瀬戸内海の悪魚退治のため讃岐に入りこの地に留まり仲哀天皇8年（199）125歳で亡くなったという。この讃留靈王について、東讃では神櫛王のことにし、西讃では武卵王（タケカイゴノミコト—日本武尊の子）のこととしている。

